

織田信長関係史料の教材化についての試論（Ⅰ）

松 島 周 一

はじめに

小学校の社会科は六学年で日本の歴史をも対象として扱うことになるが、当然ながらそこで専門的な事柄に深入りすることはできないであろう。教員は通史的な内容を、やや駆け足で、しかし子どもの興味関心になるべく削がないように扱っていくことが求められるというのが、現在の一般的な状況であるように思われる。歴史上の人物を中心にした形で授業を組み立てていくことは、そうした条件の下ではやはり有効な手法のひとつといえるのではないか。特にここ愛知県では、いわゆる三英傑のように著名な人物が活躍の足跡を残しているのであり、子どもの興味を比較的ひきやすい材料も見出しやすいように思われる。さらにこうした話題は、愛知県の場合には特に、郷土の学習と連動する側面を持つという意義も併せ持つことになるのではないだろうか。

ただ、その一方で、教員にとっては、たとえば三英傑の

事蹟を扱うといっても、どれくらい信頼できる素材があるのか（どれくらい実際にあった「歴史」として子どもに話しているのか。有名人特有の後世の「作り話」ではないと、どれだけ信用しているのか）という問題にも、しばしば直面することになってしまっているのではないか。もちろんそうした疑問を解消するための教材研究などに取り組み、より充実した授業実践につなげる、ということが理想ではあるが、多忙な教育現場でそうした時間の確保がどれだけできるのかについては、やはり職場によってもさまざまな条件の違いが出てくるように思われる。私はこれまで、愛知教育大で行なわれた教員免許状更新講習（以下、更新講習と略記する）において、尾張・三河に関係する信長の事蹟をいくつか取りあげ講述する機会を何度か与えていただいた。その際には、聴講していただいた教員の方々から、何が「正しい」歴史（※注）なのか、なかなか知る機会が無いというお話を伺うこともあった。

本来であれば、そうした現場の方々の努力を輔佐できる

よう努力し、少なくとも現在の研究の中でほぼ確からしいと考えられている事柄を発信していこうとするのが、研究に従事している立場の者にとって義務のひとつになるはずであるが、現状ではやはり教育の現場と研究の現場の間になかなか道が開けていないという課題が残るようにも思われる。私が更新講習で講座を持たせていただいているのも、そうした隙間を多少とも埋めていくための蟠螂の斧にしたいの思いからであるが、それがどれくらい意味を持ち得ているかの判定は、受講された方々からの厳しいご批判に俟つしかない。

ここでは、私がその中で信長に関して信頼できる（と考えられている）史料として取りあげたものをひとつの例として、なるべく子どもに興味関心を削がないような形で、歴史上の人物や郷土について見ていくことができないかを模索してみる、という作業を行なってみたいと思う。もちろんこれは現場の方々のご苦勞に疎い私の、空論に過ぎないことも自覚しているつもりである。多くのご批判をいただけるながら、今後とも考えを進めていきたい。

一、『信長公記』の一史料から

ここで取りあげたいのは、『信長公記』の一節である。

名前だけでは、江戸時代のはじめに小瀬甫庵が著した物語である『信長記』と混同してしまいそうだが、まったく違う著作である。『信長記』は信長の活動を直接に見聞しなかった世代の作者が著した物語であり、そこにはかなり「作り話」が入っていて「歴史」として扱うには慎重な検証が必要なものであろう。ただ、この物語は江戸時代に広く流布したために、以後の日本人の信長イメージに大きな影響を残したと思われる。

それと異なり、あまり広く世に知られる著作ではなく、知る人ぞ知るというものであった（ただし、近年では次第に注目され、さまざまな文献で取りあげられるようになっていく）。『信長公記』の方は、作者である太田牛一（一五二七〜？）が尾張出身で、実際に信長・秀吉にも仕えた武士であったという。晩年は大坂に住んで、自らの体験した事実などを軍記に描くことに専念したといわれる。そうして書かれた『信長公記』は、作者自らが「予（太田牛一）、篇ごとに、日記の次いでに書き載するもの、自然に集と成るなり」「私作私語にあらず」と述べているものであり、史料としての信頼性も高いと考えられている。現在の信長研究でも中心的に用いられている一級史料のひとつである。特にその冒頭、「首巻」といわれる部分は、信長が永禄十年（一五六七）に稲葉山城を落として美濃を征服するまで

の尾張時代の足跡についてまとめた、愛知県の歴史にとっても得難い史料になっている。

『信長公記』はすでに何度か活字化されており、一九六九年から角川文庫の一冊にも入っていた。これは使いやすく貴重な刊行物であったが、品切れになることもあったようである。近年では『愛知県史 資料編一四 中世・織豊』（二〇一四年、愛知県。以下、『県史』と略記する）にも角川文庫版の底本とされた陽明文庫本の「首巻」が翻刻されており（史料番号一。なお、史料番号二はそれと異同のある天理大学図書館本が翻刻されており、比較研究がしやすくなっている）、これからはより活用される機会も増えていくのではなからうか。

以下にその『信長公記』首巻から、天文二十二年（一五五三）に行なわれた信長と、隣国美濃の支配者であった斎藤道三との会見の模様を描いた部分を引用する。信長は道三の娘を妻にしており、これは舅が舅と対面したという出来事なのである。自分にとって舅であるとともに、隣国の支配者でもある人物と対面する。当然、信長にはそれなりの配慮が求められる会見ということになろう。当時、信長は二十歳であった。ただし、これは満年齢ではない。江戸時代までの日本史に登場する人物の年齢は、すべて数え年で示されている。現在の満年齢と比べると、一〜二歳上に

なっていよう。この時の信長は、今なら大学に入ったばかりというくらい若者であった。その人物がどのような姿をみせたか、なかなか興味深い記述がみられる。なお、引用は『県史』（二八〜三一頁。以下、史料引用の頁数はすべて『県史』による）から行ない、意味を取りやすいように仮名部分には適宜漢字を示した。

『信長公記（首巻）』より

四月下旬の事候。斎藤山城道三、富田の寺内正徳寺（聖徳寺）まで可罷出候間、織田上総介殿も是まで御出候ハ、可為祝着候。対面有度之趣申越候。……先山城道三八町末之小家に忍居て、信長公之御出之様躰を見申し候。其時、信長の御仕立、髪ハちやせん（茶筌）に遊し、もゑぎ（萌黄）の平打にてちやせんの髪を巻立、ゆかたひら（湯帷子）の袖をはつし、のし（熨斗）付之大刀・わきさし（脇差）二ツなから、長つか（柄）にミゴなわ（三五縄）にてま（巻）かせ、ふとき学なわ（縄）うでぬき（腕貫）にさせられ、御腰のまはりには猿つかひ之様に火燧袋・ひようたん七つ、八つ付させられ、虎革・豹革四つかはり（変わり）の半袴をめ（召）し、御伴衆七、八百、薨を並、健者先に走らかし、三間間中柄之朱やり五百本計、弓・鉄炮五百挺

もたせられ、寄宿の寺へ御着候て、屏風引廻シ、

一、御ぐし折曲に一世の始にゆわせられ、

一、何染被置候を知人なきかちん（褐色）の長袴めし、
一、ちいさ刀、是も人に知らせず拵をかせられ候をさゝ

せられ、御出立を御家中の衆見申候て、去ては此比た
わけを態御作候よと、肝を消、各次第くゝに斟酌仕候
也。……（道三は）附子をか（嚙）ミたる風情にて、

又やがて可参会と申罷立候也。廿町計御見送り候。其
時、美濃衆の鎧ハミじか（短）く、こなたの鎧ハ長く
扣立候てまいり候を、道三見申候て、興をさましたる
有様にて、有無を申さず罷帰候。途中あかなべ（茜部）
と申所にて、猪子兵介、山城道三に申様ハ、何と見申
候ても、上総介ハたはけにて候と申候時、道三申様に、
されは無念成事候。山城が子共、たわけが門外に馬を
可繫事、案之内にて候と計申候。自今已後、道三が前
にてたわけと云事申人無之。

〔以下、現代語訳〕

〔一〕内は松島による注〕

四月下旬のことであった。美濃の斎藤道三から織田信長
に対して、「富田（一宮市）の聖徳寺まで出向くから、
そちらも出て来てくれたら有難い。是非お会いしたい」
との申し入れがあった。……（先に対面場所に着いた）

道三はこっそりと小さな家屋に潜み、信長がやって来る
時の様子を見ていた。その時の信長の姿といったら、茶
筌のように突き立てた髪を萌葱色の平紐でぐるぐる巻い
ている。浴衣を着て、その片袖を脱いでいる。飾り付き
の大刀と脇差を二本差してはいるが、長い柄は縄でぐる
ぐる巻にしてある。からむしで縛った太い縄を腕輪にし
ている。腰のまわりには猿まわしのように火燧袋やらひょ
うたんやらを七つも八つもぶら下げて、虎革・豹革を四
色に染めて縫い合わせた半袴をはいている。その護衛部
隊は七、八百人ほど。びっしりと整然と進んでくる。屈
強な者が先頭に立ち、六メートル余の真っ赤な長柄の槍
は五百本ばかり、弓・鉄砲で武装した者も五百人ほども
いる。寺に着いてから、信長は屏風の中に隠れて着替え、
その姿は一変した。生まれて初めて結った折り曲げる形
の髪型。いつ染めて用意しておいたのか、周りの者も知
らなかった褐色の長袴をはき、身に付けている小刀も誰
も知らないうちに装飾を凝らしたものであった。この姿
を見た織田家の武士たちは「そうか、これまでたわけ姿
をわざと見せていたのか」と仰天し、みな段々とこれま
での態度を改めたりするようになった。……（別れ際に）
道三は苦虫をかみつぶしたような顔つきで、「いずれま
た、お会いしよう」と言ってお出发了。信長はそれを二

キロほど見送った。(尾張勢と美濃勢が並んで進む)その時、道三は美濃勢の槍が短いのに、尾張勢の槍はずっと長く、天に向かって突き立っているのを見比べて、いやあな顔をしたまま無言で立ち去った。帰途、道三の一行は茜部(岐阜市)を通った。そこで、伴をしていた猪子兵介が「どう見ても、あの信長というのはたわけ殿ですわ」と感想を述べると、逆に道三は「無念だ。俺の子孫はあのたわけに征服されて家来になるぞ。必ずそうなる」とだけ口に出した。それからは、道三の前で、信長をたわけと呼ぶ者はいなくなった。

少し長すぎる史料引用と思われるかもしれないが、内容は信長という人物を知る上でも、信長の拠点となった尾張という地域についていく上でも、さまざまな手がかりを与えてくれるものである。ただ、『信長公記』に限らず、時代や人物について考えていくことのできる興味深い史料を活字化することは、多くの資料集(特に自治体史として刊行されるものが多く、また概してそれらは精確な翻刻となっている場合が多いと思われる)によって行なわれてきているが、その際には、ほぼ漢字だけの原文を活字化するか、あるいは精々が読み下し文に直して解説を付すといった形になることが一般であろう。これは出版にとま

な技術的、財政的、その他さまざまな理由によることであり、今後も簡単には変わっていかない形であろうと思われる。しかし一方で、それではどれだけ貴重な史料であっても、現場の教員はなかなか使うことができない、というご意見は、更新講習の場などでも伺うことがある。取り敢えずここでは、多少なりとも読者の方が触れやすいものになればと思い、私の拙い現代語訳を付してみた。以下の話の展開については、適宜そちらの訳文を参照していただければと思う。

二、若き信長の人物像

ここには「たわけ」とよばれていた若き日の信長の姿が活写されている。『信長公記』という信頼性の高い史料に載せられた話であり、実際にあった出来事として捉えても問題はないと思われる。伸ばした髪を紐でぐるぐる巻きにして突き立てた茶筌髷や、片袖を脱いだ浴衣姿、腰にぶらさげた袋、革製の半袴といった突飛な姿は、小説などにも描かれてかなり知られたものかもしれないが、それはこうした典拠のある、事実性の高い話柄であったといえよう。『信長公記』首巻では、ほかの場所でも「(十代後半の頃の信長は)町中で、人の目も気にせずに栗・柿・瓜などの果

物にかぶりついていた。また、立ちながら餅に食らいついている時もあった。人によりかかって、その肩にぶらさがるような（だらしな）姿でいつも歩いていった。その頃の世の中では、キチンとした礼儀正しさが尊重されていたから、人々はみな、信長のことを大うつけとしかばななかった」という記述もあり（『県史』二五頁）、信長の個性的すぎる姿かたちや行儀の悪さは、地元ではかなり知られた話であつたらしい。

ただ、その一方で、道三との会見では必ずしも自己流を押し通さず、きちんと礼儀作法を守るという姿もみせている。これは時と場所と相手を選んで行動できるということであり、必要であれば大人の対応もしてみせるということであろう。それは、信長の思考や行動が、柔軟な合理性を有していたということを意味している。信長といえば、古い考え方にとらわれない革新的な人物といったイメージが持たれているかもしれないが、むしろ保守的な部分も含めて自分の中に多くの引き出しを持ち、それゆえ状況に応じてさまざまな対処ができる、柔軟で合理的な顔を併せ持った人物とみた方がいいのかもしれない。

次に注意したいのは、道三との会見の場で信長がみせた変身ぶりに、「御家中の衆」すなわち信長の家臣たちまで驚かされた、という部分である。これは、信長がごく少数

の自分の側近たちだけにあらかじめ命令して、変身の準備をさせておいたということ意味する。それ以外の家臣たちは蚊帳の外に置かれていたのである。自分の家臣たちにも知らせず、わずかな側近だけで大事な問題に対処するという姿からは、基本的に他者を信用しないという、やや自信過剰で猜疑心の強い様子がうかがえるように思える。これは組織のトップの姿勢という角度からみれば、意思決定の迅速さや指揮系統の一元化（これらは悪くいえば「独裁的」ということになるが）という利点がある半面、ごく一部の側近以外の部下たちには疎外感や不安感を与えてしまうものであるかもしれない。織田家という組織が小さいうちには前者の利点が大きかったであろうが、のちに信長による天下制覇が日程にのぼってくる（当然、それだけ雑多で大量の家臣を新たに抱え込んでいる）ような段階になると、巨大化した組織があちこちで疲弊してしまう側面も出て来たのではなかったか。

ここに述べたことは、私がこの史料から取り敢えず気付いた部分である。ということは、別の人が読めば、この同じ史料から、まだ別の信長像を描くことができるかもしれない、ということになる。史料を読むという作業は、そうしたさまざまな可能性が開かれていることであるが、ただ、そのためには相応の時間や労力を割くことが求められよう。

本来は、それを含めた教材研究の余裕があることが最良なのであるが、そうした対応が困難な場合の参考にしていただければということで、ここでは敢えてひとつの見方を提示してみたものである。

三、尾張の軍勢力

会見からの返り道、賀である信長は礼儀として舅の道三を暫く見送ることになった。すると、両者の護衛の軍隊すなわち尾張と美濃それぞれの精鋭ともいうべき親衛部隊が並んで移動することになる。これは、大袈裟に言えば両国の軍備を比較する絶好の機会でもあったということになるであろう。その点で『信長公記』は非常に興味深い記事を残してくれたことになる。

尾張と美濃の軍備の比較という点ですぐに気が付くのは、尾張勢の槍は柄が長く、美濃勢の槍はそれに比べて短かったということである。そして、それに気付いた道三が不機嫌になっていることも重要であろう。道三は自軍の劣勢を見せつけられたからこそ不機嫌になったわけであるから、逆にいえば、尾張の信長は美濃に比べてより優秀な軍勢力を保有していたことになる。このようにいうと、槍は長い方が相手に届きやすいから有利なのは当たり前であり、美

濃勢も槍を長くすればいいだけの話だとの反論もあるかもしれない。これはその場限りの話で、すぐに美濃勢が槍を長く改良すればいいのだから、この史料は両国の軍備の優劣を比較する材料にはならない、と。

ただ、この史料で注意していただきたいのは、尾張勢の槍の柄が「三間間中」の長さであったということである。三間半すなわち六メートル余りの柄がついた槍なのであった。普通、こんな槍を実際の戦場で武器として使いこなすことができるものであろうか。慣れない使い手であれば、逆に扱いに手間取って敵に不覚を取ってしまう可能性が高いように思われる。ただ単に槍の柄を長くするだけでは、むしろ自軍に不利な展開を招来しかねない。これは付け焼き刃の対応が出来ない話なのである。『信長公記』首巻では、信長が竹槍での叩き合いを見て十代後半の頃から短い槍ではだめだと言い、六メートル前後の槍を部下に持たせるようにした、と書かれている（『県史』二四頁）。当初は自分の部下だけのことであったろうが、織田家を嗣いでからはその方針をさらに拡大したのではなからうか。『信長公記』に従う限り、信長の下で織田勢は、長槍の扱いに習熟した集団に変貌していったといえるように思われる。

そうであるからこそ、歴戦の武士である道三は目の前の現実には暗然となったのであろう。彼は、急には埋めきれな

い差が、信長の軍事力と自軍との間に開いてしまっていたことに気付かされたのである。自分の子孫が信長に征服される、すなわち信長が美濃を奪うことになる、と道三が口にしたというのは、信長の個人的資質が印象深かったためでもあったろうが、何よりも隣国の織田軍団がいつの間にか達成していた精強ぶりに脅威を感じたからであろう。なお、こうした斎藤道三側の場面を信長方の武士であった太田牛一が実際に見ていたはずはないが、のちに信長は美濃を制圧し、多くの現地の武士を配下しているから、そこから織田家中にこの話が伝わったという想定は十分に可能である。その意味では、この道三の呟きも、信頼できるエピソードといってもいいであろう。

ところで、六メートルもの長槍を使いこなす軍隊とはどのようなものであろうか。勿論、個々の兵士が鍛錬によって、長くて重い槍に負けない体力を獲得することも必要であろうし、それ自身が時間のかかることでもある。ただ、個人の体力には差もあり、何百人という部隊の全員が同じように長槍を振り回すことは、なかなか実現しにくいのではないか。その時に注目したいのは、「御伴衆七、八百、薨を並べ」すなわち信長の配下は数百人がびっしり整然とまとまって動いていた、という記述である。これは信長の軍隊が各人ばらばらの戦い方をするのではなく、密集

した集団として機能する傾向が強い、ということを意味すると思う。

『信長公記』首巻は別のところでも、織田家を嗣いだ頃の信長は周囲が敵対勢力ばかりという苛酷な状況に置かれていたが、戦場では一度も負けなかった、それは「究竟之度々の覚の侍衆七、八百、薨を並御座候」すなわち歴戦の猛者たち七、八百人が整然と密集して信長に従っていたからである、と述べている（『県史』五一頁）。まさしく信長は自分の配下たちを訓練と実戦経験の中で、集団戦が可能な専門的部隊に育てあげていたといえよう。信長の戦闘指揮官としての能力は相当に高かったと思われる。

そして、長槍を有効に使いこなす上では、こうした密集した集団の方が有利であることは容易に推測できる。個々の体力に差があっても、密集した縦隊で前の者の肩に槍を重ねて行けば、ハリネズミのような槍ぶすまを作ることが可能になる。ただ、その戦法が機能するためには、部隊全員の一致した動きが必須であり、それはまさに一体として訓練と実戦を重ねた専門的集団にしかできないことであろう。言い方を換えれば、それは戦いのある時にだけ動員するような臨時編成ではない、常備軍のような存在でなければならぬということである。信長は若いときから、まだ小規模な自分の軍隊を常備軍化して、徹底的に鍛え上げる

ことで、他者の真似ができない常勝軍団にしていたといえよう。道三は信長の親衛部隊の槍に着目することで、さすがにその背景にある軍事力の質に思い至ったのではなからうか。

四、尾張の経済力

ところで、簡単に常備軍といったが、そうした軍隊を作り維持していく上で必要な条件は何であろうか。それはいうまでもなく、一定の経済力の裏付けを持つことである。

ここでは兵農分離という厄介な話には深入りしないが、たとえ兵農分離した段階の武士であろうと、自給自足の所領に張り付き、必要な時だけ動員されて戦闘に出ていく、ということでは常備軍を構成することは不可能である。逆に言うならば、常備軍を作ろうとする大将には、部下を常に自分の下にとどめ、訓練していくために、彼らが不満を持たないよう養う義務が生じるのである。大将が莫大な食料や金銭を集めることのできる富裕な領主でなければ、常備軍を育てることはできない。一方、配下の武士たちにしてみれば、自分が所領を離れていても十分な生産が可能であるという安心がなければ、常に大将の下にとどまっていることはできないであろう。いずれの場合にも、その大将の

支配する領国が高い生産力や経済力を持っていることが必要になる。その条件がなければ、いくら長槍を使いこなせる常備軍を作ろうとしても、実現の可能性は薄いということなのである。そう考えれば、道三が落胆した尾張と美濃の軍備の差は、両国の経済力の差、あるいは経済力を有効に動員して領主の軍事力に転化できるかどうかの環境の差を示していたということにもなる。後者については、美濃が歴史的にも地理的にも各地に割拠する勢力が多く、なかなかまとめるににくいという条件を考慮することも必要であろう。ただ、ここではやはり尾張の経済力自体に着目することが大事であると思う。

尾張の経済力という場合、まず想起されるのはその高い農業生産力である。もちろん、ある国の国力は農業生産だけでは測りきれず、それ以外の産業や交通、地形、文化などさまざまな角度から見ていくことが必要になるが、ここでは一番数字として分かりやすい農業生産力、特に石高で考えてみたい。この頃の諸国の石高をみようとすると時に使われてきたのは、まず『大日本租税志』という本である。これは明治時代のはじめ、大蔵省が租税制度の沿革を調べるために作った本で、多くの史料が引用されている。その中に「慶長三年蔵納目録」という史料があり、そこから慶長三年（一五九八）の日本の総石高は一八五〇万石である

とか、豊臣家の蔵入地が二〇〇万石（実際は二二〇万石以上あったらしい）であるとかの数字が出されている。ちなみに慶長三年は豊臣秀吉が没した年であった。ただ、これは原本不明で引用されている史料であり、また他の史料から補足しなければならない部分もあるなどの弱点も持っている。

また「慶長三年蔵納目録」と内容がほぼ同じである「日本賦税」という史料（国立公文書館所蔵）は、水戸藩の彰考館が持っていた江戸時代前期の写本を、さらに明治時代はじめに政府の修史館が写したものであり、こちらも慶長三年の日本や諸国の石高をみる時によく使われている。

これらの史料によると、慶長三年頃の尾張の石高は五七万石余。これよりも多い国は、陸奥（現在の福島・宮城・岩手・青森という東北地方の太平洋側全体を占める広大な国である）の一六七万石余というのは別格として、近江（現在の滋賀県）の七十七万五〇〇〇石、武蔵（現在の東京都・埼玉県と神奈川県の一部）の六六万七〇〇〇石だけであった。尾張に次ぐのは伊勢の五六万七〇〇〇石、美濃の五四万石など東海地方の諸国である。美濃も相当なものであるが、面積なども考えれば、尾張の生産性の高さは群を抜いているといえよう。

もちろん道三と会見した頃の信長は、まだ尾張全体を支

配してはいなかった。信長が尾張をほぼ制圧した（ただし知多半島は除く）のは、永禄八年（一五六五）の犬山城攻略によってであると考えられている。しかし、たとえ支配地が尾張半国であっても、そこが生産性の高い土地である事実は変わらない。それが信長の軍事力の背景になっていたことは確かであると思われる。すなわち、『信長公記』の記述から信長の軍事力に注目することは、その背景としての尾張の高い農業生産力に注目することにもつながるのである。それはさらに、こうした農業が可能な地理的条件としての濃尾平野の広がりや、そこを流れる河川の大きさ、多さなどを説明するきっかけにもなると思われる。

次に、尾張の経済力を支えていた条件としては、その流通、特に海上交通とのつながりが重視されている。こちらにも近年急速に研究が進んできた分野である。もともと伊勢湾方面と東日本とをつなぐ太平洋海運については、関東地方などの中世遺跡から多くの常滑焼や渥美焼（これは鎌倉時代に廃絶してしまうが）の破片が見つかったため、すでに古代末期には活発に機能していたのではないかと考えられていた。大きくてこわれやすい常滑焼や渥美焼の壺・甕などを遠隔地に大量に運ぶには、陸路は困難であり、水運が想定されるのは自然な話なのである。東国への分布も含めた常滑焼関係の研究については、たとえば『常滑焼と

中世社会』(小学館、一九九五年)などが(少し以前のものではあるが)分かりやすいものであろう。こうした考古学的な知見から想定されてきた前近代の太平洋海運の実態、その一方の拠点である伊勢湾周辺の流通の様相などを、文献史料を用いた歴史学の側面から明確に描き出した研究としては、綿貫友子氏の『中世東国の太平洋海運』(東京大学出版会、一九九八年)にまとめられた諸論文が、参照すべきものになる。

海運が発達するということは、それだけ大規模な流通があり、経済的利益が得られるということに他ならない。尾張はそうした利益を得やすい場所に位置する国であった。さらに、織田家は信長の父である信秀の時代から、津島や熱田を支配下に置いていた。中世までの津島は現在の地形とはやや異なっていて、広大な河口部を通して伊勢湾につながる港湾都市としての機能を持っており、また熱田も江戸時代までは海に面した港として機能する、有力な商人の存在した町であった。だからこそ、江戸時代の東海道は、宮すなわち熱田の港から桑名へと船で渡るものになっていたのである。

津島や熱田は、尾張の海運にとってもっとも重要な拠点になる場所であったわけで、信長はそこをしつかりと押さえていたのである。その点では、石高が示す以上に美濃に対して経済的に優位に立てる環境を、信長と尾

張は持っていたということになる。これもまた、信長の尾張軍団が他国に比してより精強な常備軍になり得た背景と考えてよいであろう。それゆえ、日本の歴史においては、早い段階から太平洋海運を通して東西の地域が経済的にむすびつく状況があり、尾張はその重要な拠点としての位置を占めていたということを、信長の軍勢力に注目することから、説明していくことが可能になると思う。それは、現在も日本各地で活発に展開するさまざまな物資の流通と愛知県との関係を理解する上でも、意味を持ってくる説明になるのではなからうか。

むすび

以上に述べてきたことは、私が『信長公記』の一節からみえてくると考えた、地元の歴史的な人物である信長についての学習、あるいは尾張ひいては愛知県の地理的・歴史的環境に関する学習のための、ひとつの見方である。何度も述べてきたように、これはあくまで私の見方であって、もっとさまざまな可能性をこの史料から汲み取ることもできると思う。私の貧しい発想でこうした一例を提示することとは、かえってこうした史料の活用の可能性を狭めてしまいかもしれないが、多くの方々からのご批判をいただいて、

私自身の考えを進めていくためにも必要と思い、敢えてこのように一文を草した次第である。

〈※注〉

何が「正しい」歴史であるのか、というのは、実は歴史学にとって最も根元的で難しい問題である。歴史の「事実」は、最初から当たり前のこととして分かっているのではない。すべては史料から得られる情報を、論理的に扱うことによって、「復元」され「発見」されている。従って後代の人々の「復元」や「発見」の作業が無ければ、歴史の「事実」も闇に埋もれたままとなってしまうわけである。

さて、「事実」の「復元」「発見」にあたっては、残された史料が明確な情報を載せていて、そこから直ちに何かが分かる場合もある。しかし、そんな幸福な事例はむしろ少数であろう。その一方で、断片的な史料を見つけ出し、情報を引き出し、それを論理的に組み合わせる積み重ねの中から「このように考えるのが妥当であろう」という仮説がつけられる形で「復元」「発見」があり、むしろこちらの方が多数派ではなからうか。そうやって形づくられた仮説が、学界などで広く「説得力を有するものである」と認められると

「通説」になる。「通説」というとあたかも絶対の「真実」であるかのように受け取られることもあるが、実際にはそれはあくまでひとつの仮説にすぎない。新たな史料が見出されたり、研究者の考え方が変わったりすると、別の仮説が説得力を持つようになることもある。するとその結果として、「通説」が書き換えられ（て教科書の記述が変わる）ことも起こり得るのである。その意味では、歴史には唯一絶対の「真実」はあり得ない（むしろ考察する人の数だけ「真実」がある）ということになろう。

従って、敢えて言うのであれば、はじめから確固たる「正しい」歴史があつて不変である、ということではなく、むしろある程度の覚悟を決めて、取り敢えず「正しい」と他人に説明できるような歴史像を、自分が学び考えていく、というのがもっとも望ましい歴史との付き合い方になると思われる。ただ、これはなかなか一般の方が実行するのは困難なことであり、歴史研究の側がそのための作業や材料を多少なりとも提供していく、そのための努力を行なっていく、ということがやはり必要になるであろう。とはいえ、そのために何ができるのか、何をしていくべきであるのかは、歴史研究の側でもまだ暗中模索の状態であるように思

われる。その意味でも、今後の教育と研究の交流がより活発になることを願ってやまない。